

7. 和歌山市における平成3年度耳鼻咽喉科 三歳児健診の結果の検討

加藤 寛*1 永井 尚子*2

緒 言

平成2年10月から三歳児健診に耳鼻咽喉科も参加することとなり、現在各地で実施されている。和歌山市においては、平成2年秋より、パイロットスタディーにはいり、平成3年4月から本格的にこの健診に参加してきた。この健診への耳鼻咽喉科参加の目的については現在でも議論のあるところであるが、我々は以下のように考えて実施してきた。その主なる目的は、高度難聴児を発見する最後の砦として、また中等度難聴児、軽度難聴児を検出することである。そして軽度難聴をきたす疾患である滲出性中耳炎罹患児を検出することも、この健診の重要な課題としてとらえている。

今回、平成3年度の耳鼻咽喉科三歳児健診の結果について検討し、上記の目的を達成できているかどうかを考察してみたので、ここに報告する。

対象と方法

表1は、平成3年4月から4年3月の期間に、

表1 三歳児耳鼻咽喉科健診月別受診児数(平成3年度)

	H. 3						H. 4						計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
受診児数	267	265	250	295	277	308	315	264	272	261	262	286	3,322(名)

和歌山市中央保健所、その南支所、和歌山市西保健所において耳鼻咽喉科三歳児健診を受診した対象児の月別人数である。総計3,322名であった。

表2は、健診前に各対象児の家庭に送付しておく調査票である。この調査票は、アンケート項目を非常に簡略化して6月より使用しているものである。項目は、(1)髄膜炎の既往の有無、(2)呼んだ時の返事の有無、(3)聞き返しの有無、(4)言葉の遅れの有無の4項目のみである。それまでは、これらを含めてもう少し項目を多く用いていた¹⁾。しかし、家族性難聴などのリスクファクターは1歳6ヵ月健診までにチェックされていることより、重複を避けるために省略した。さらに家庭内で絵カードを用いたささやき声検査と指こすり音検査を実施して結果を書き込むようになっている。図1は、ささやき声検査に用いた6種類の絵カードと、指こすり音検査の方法を示している。なお8月からは、6種類の絵カードのうち「うま」を「ねこ」に変えて用いている。

我々はパイロットスタディーの段階より、健

*1和歌山労災病院耳鼻咽喉科

*2和歌山市西保健所

表2 三歳児聴覚健診調査票

幼児氏名 _____

1 次の項目のうち、あてはまる項目を○で囲んでください。

- (1) 今までずい膜炎にかかったことがありますか。 はい いいえ
- (2) 耳の聞こえについて
- 1) 呼んでも返事をしないことがありますか。 はい いいえ
- 2) 話しかけたとき聞きかえすことがありますか。 はい いいえ
- (3) 言葉がおくれていると思いますか。 はい いいえ

2 お子さんの耳の聞こえの検査の結果について

下記の□の中に、聞こえていれば○、聞こえていないようなら×、わからない場合は△をつけてください。

(1) ささやき声の検査

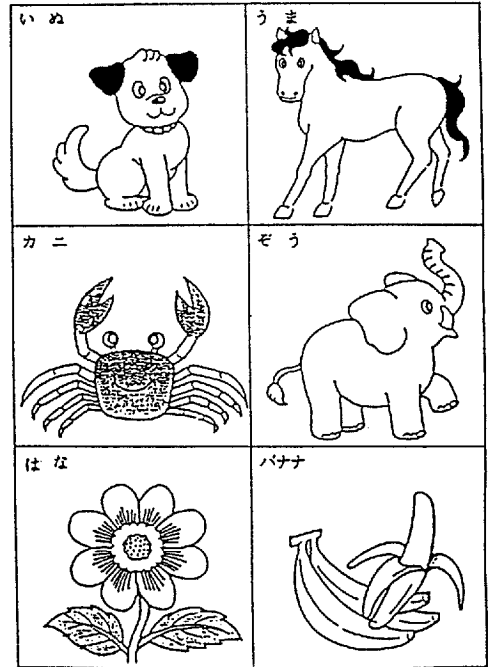
(2) 指こすり音検査

査						
	いぬ	うま	カニ	ぞう	はな	バナナ

右耳	左耳



絵シート



2 指こすりによる聞こえの検査 絵2

- ① 表は子どもの後ろに位置します。
- ② 表は子どもの耳のまは5cmぐらいのところ、裏面と人差し指を5〜6回こすります。
- ③ 子どもが聞こえたら、手をあげさせるようにします。
- ④ 最初は右、左というように、交互に行います。

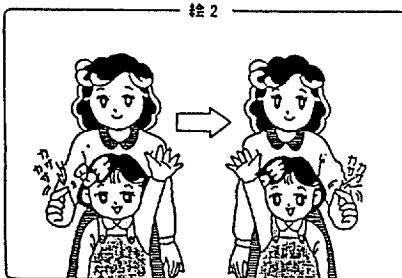


図1 ささやき声検査・指こすり音検査と用いた絵シート

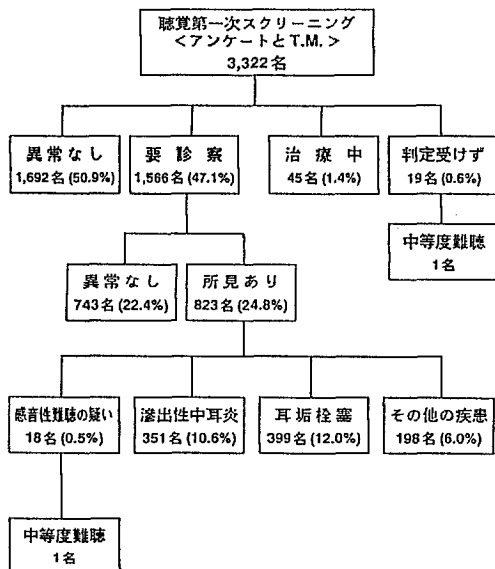
診当日保健所で受診児全員にティンパノメトリー（以下TM）を実施している。そして保健婦が、その結果と調査票をチェックして、その日の耳鼻咽喉科専門医の診察が必要かどうかをセレクトし、要診察と判断された児は耳鼻咽喉科医の診察へと送られる。TMは、リオン社RS-31を使用している。

要診察児はアンケートに異常のあるもの、さきさき声検査では6枚の絵の内3枚以上正解できないもの、指こすり音検査で異常のあるものとした。TMはAs・B・C型と、暴れてこの検査のできなかったものを要診察児に取り上げた。

結果と考察

表3に結果を示した。要診察児は47.1%であった。そのうちなんらかの所見の認められた児は約4人に1人(24.8%)であった。最も多かったのは耳垢栓塞で12.0%であった。滲出性中耳炎

表3 和歌山市三歳児耳鼻咽喉科健診の結果
(平成3年度)



は10.6%に認められていた。難聴の疑いのため精密検査票の発行を受けたのは18名(0.5%)で、そのうち1名に中等度難聴が認められた。また中等度難聴児1名をとりこぼしかけた。しかし、この子供は、当日の心理の発達相談のところで引っ掛かってきていた。

1年間に精密健診票を発行されたのが18名(0.5%)であったため、紹介を受ける医療機関でもそのために大きな負担を受けることはなかった。精密検査は、和歌山県医科大学附属病院・和歌山赤十字病院・和歌山労災病院耳鼻咽喉科に紹介されるようになっている。耳垢栓塞・滲出性中耳炎・その他の疾患の診断を受けた児は、開業医を含めた耳鼻咽喉科専門医で治療を受けるよう指導されるようになっている。

視診で滲出性中耳炎の所見が認められたもの351名の月別検出頻度を見てみる(図2)と5月・11月は平均的数字であり、6月から10月に少なくなっていた。この時期に上気道炎が少ないことと関係しているものと思われる。12月から4月には平均より多く検出されていた。これらの罹患児のうちどの程度の人数が難治性に移行して行っているか今後調査してみる必要があるが、健診当日これだけの患児が存在していることは

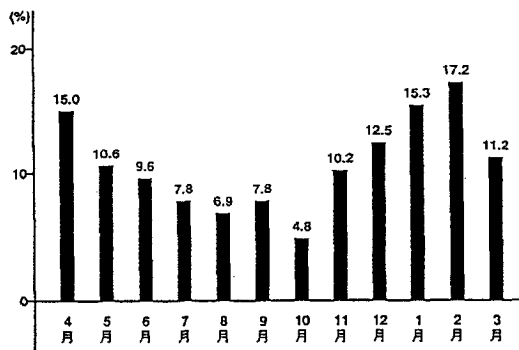


図2 滲出性中耳炎患児の月別検出状況

無視できない事実である。

中等度難聴児のオーディオグラムとアンケート結果を図3に掲げた。聴力は右のごとくであった。この患児は取りこぼしかけた子供であるが、低音部の聞こえがよいために、返事をしないことは時々となっていた。しかしその他の項目で引っ掛かってきていた。TMは両側A型で、「いいですよ」と言われたことと、母親が当日忙しくて急いでいたことが重なって、耳鼻咽喉科診察に回って来ず、他科に進んだようである。表4は、この児の生育歴である。1歳児健診の

時に多少注意を要する点があるだけで、特に問題となるところはない。このような聴力の難聴児が最も取りこぼされる危険があり、その特徴は言語発達の遅滞である。この点を健診医は肝に銘じておくべきである。

耳鼻咽喉科健診にて要精査となり、中等度難聴が検出された児のアンケート結果とオーディオグラムを図4に示した。母親はアンケートに対し、呼んでも返事をしないことがあり、言葉が遅れていると記入していた。ささやき声検査や指こすり音検査には全くのってきていなかった

幼児氏名 M.M.(♂)

1 次の項目のうち、あてはまる項目を○で囲んでください。

(1) 今までずい膜炎にかかったことがありますか。 はい いいえ

(2) 耳の聞こえについて

1) 呼んでも返事をしないことがありますか。 はい いいえ(時々)

2) 話しかけたとき聞きかえすことがありますか。 はい いいえ

(3) 言葉がおくれていると思いますか。 はい いいえ

2 お子さんの耳の聞こえの検査の結果について

下記の□の中に、聞こえていれば○、聞こえていないようなら×、わからない場合は△をつけてください。

(1) ささやき声の検査

いぬ	うま	カニ	ぞう	はな	バナナ
△	△	△	△	△	△

(2) 指こすり音検査

右耳	左耳
△	△

オーディオグラム

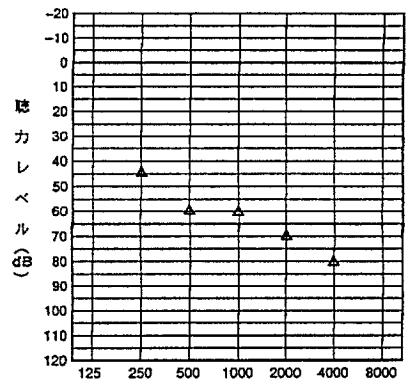


図3 中等度難聴児(M.M.)のアンケート結果とオーディオグラム

表4 中等度難聴児(M.M.)の生育歴

〈患児〉 M.M. (昭和63年7月25日生)

出生歴、新生児期；特記事項なし

3カ月児健診、6カ月児健診；特記事項なし

1歳児健診；相談内容 理解が乏しいのでは？

バイバイ(-), 単語 0

ものまね(-), 理解 ±

1歳6カ月児健診；未受診

三歳児健診； 内科；特記事項なし

耳鼻咽喉科；要診察 アンケート所見あり

T.M. 正常 →忙しくて診察受けず。

発達相談：軽度M.R.の疑いでGroup Thrapyの対象となる。

4カ月後に、中等度難聴のあることが判明。

幼児氏名 N.Y.(♂)

1 次の項目のうち、あてはまる項目を○で囲んでください。

- (1) 今までずい膜炎にかかったことがありますか。 はい いいえ
- (2) 耳の聞こえについて
- 1) 呼んでも返事をしないことがありますか。 はい いいえ
- 2) 話しかけたとき聞きかえすことがありますか。 はい いいえ
- (3) 言葉がおくれていると思いますか。 はい いいえ

2 お子さんの耳の聞こえの検査の結果について

下記の□の中に、聞こえていれば○、聞こえていないようなら×、わからない場合は△をつけてください。

(1) ささやき声の検査

いぬ	うま	カニ	ぞう	はな	バナナ

(2) 指こすり音検査

右耳	左耳

(全く検査に乗ってこなかった。)

オーディオグラム

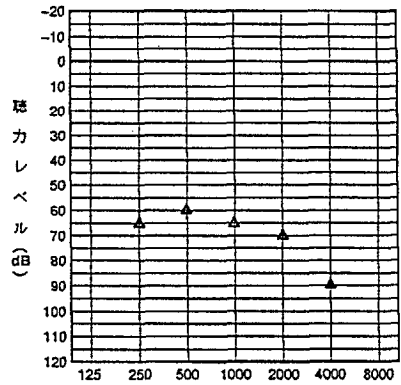


図4 中等度難聴児(N.Y.)のアンケート結果とオーディオグラム

表5 中等度難聴児(N.Y.)の生育歴

〈患 児〉N.Y.(昭和63年10月4日生)

新生児期；特記事項なし

1カ月児健診；股関節開排制限あり整形外科にてフォロー

3ヵ月児健診；腹臥位不良にて要観察

6カ月児健診；6カ月時に無熱性けいれんあり，坐位不良。

その後一回同様のけいれんあり，和歌山労災病院小児科にて脳波検査は異常なし。以来抗痙攣剤内服。

坐位獲得：10カ月

1歳児健診；抗痙攣剤内服中。停留嚥丸あり。私立位で体重支持なし。尖足あり。要観察。

独歩獲得：1歳4カ月

1歳6カ月児健診；痙攣・停留嚥丸にて労災病院小児科・泌尿器科管理中。

相談事項：「ことばが遅い」

心理相談：ことばの遅れにて要観察

2歳心理相談 → 単語8語

2歳8カ月心理相談 → 一語文。発音不明瞭。

児童相談所紹介

その後児相に月2～3回通所

三歳児健診；月1回労災病院小児科・泌尿器科にて管理中。

耳鼻咽喉科検診：左外耳道閉鎖症・難聴の疑い要精査

和歌山県医大耳鼻咽喉科にて左外耳道閉鎖症・中等度

難聴の診断 → 骨導補聴器装用にて県立ろう学校

幼稚部入園フォロー中。

た。話しかけたとき聞き返すことがあるかどうかについては、母親自身がよくわからなかったことが、○印をしかけてやめている答え方によく現れているように思われる。この児の左耳には外耳道閉鎖症が入口部から約5mmのところ認められていた。この難聴児の生育歴を表5に示したが、このように1ヵ月健診の時から、身体的には問題があったが、聴力的に問題が明らかになっているのは1歳6ヵ月健診の時であった。しかし、この時点では明らかに取りこぼされていた。その後、心理の発達相談や児童相談所にも通っているが、耳鼻咽喉科への紹介はされていない。この症例に関しては保健所のほうにも非常な反省点を与えてくれた。この症例でも言語発達遅滞を重要視していればもっと早期に難聴が検出できたであろうと思われる。

表6は、平成3年4月から11月までの8ヵ月の間に和歌山市西保健所でフォロー対象児となった136名の医療機関受診状況である。確実な受診率は115/136(84.6%)となっていた。この数字の善し悪しは解らないが、滲出性中耳炎3名、耳垢栓塞8名の未受診が気になるところである。健診後の説明の重要性を痛感させてくれている。

最後に、我々の健診での滲出性中耳炎罹患児検出率が10.6%と、多いように思えるが、これ

はTMにおいてA₀・C₁型における患児をも取り込んでいることに起因していると考えられる。この点に関しては、健診時に要治療と診断された児の追跡調査により、さらに検討を加え、難治性滲出性中耳炎に移行していく可能性の高い患児を検出していく必要性を感じている。

結 論

- (1) 和歌山市において平成3年度に実施した三歳児聴覚健診の結果について検討して報告した。
- (2) 受診児3,322名のうち、823名(24.8%)になんらかの異常所見が認められた。
- (3) 耳垢栓塞399名(12.0%)、滲出性中耳炎351名(10.6%)、難聴の疑いにて精密検査をうけた児18名(0.5%)のうち中等度難聴1名、その他の疾患198名(6.0%)が検出された。中等度難聴児1名を取りこぼしかけた。
- (4) 中等度難聴児2名の聴力像・アンケート結果・健診歴の検討により、「言語発達遅滞」を見逃さないことの重要性を再認識した。
- (5) 和歌山市西保健所管内の一部要精査児・要治療児の健診後の医療機関受診状況についても言及した。
- (6) TMを加えた和歌山市における耳鼻咽喉科三歳児健診は、ほぼその目的を達成できている

表6 要精査児・要治療児の検査後の医療機関受診状況

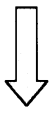
検査結果	難聴の疑い 5(名)	滲出性中耳炎65(名)	耳垢栓塞 48(名)	他の疾患 18(名)
医療機関 の 受診状況 と その結果	異常なし 3	治療なし 16	鼓膜所見なし 23	治療なし 6
	一側軽度難聴 1	内服治療 16	滲出性中耳炎 6	治療 6
	中等度難聴 1	鼓膜切開 4	中耳炎 5	
		その他 4	耳管カタル 2	
			副鼻腔炎 1	
			その他 1	
		未受診 3	未受診 8	未受診 3
		連絡とれず 2	連絡とれず 2	連絡とれず 3

(平成3年4月から11月までの和歌山西保健所受診児673名のうちフォロー対象児136名)

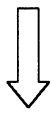
と評価できた。しかし、改善する余地もあると
考えている。

参考文献

- 1) 加藤 寛, 田端敏秀, 寒川高男, 永井尚子:
和歌山市における耳鼻咽喉科三歳児健診の
試み. *Audiology Japan*, **35**, 104-111, 1992.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



緒言

平成2年10月から三歳児健診に耳鼻咽喉科も参加することとなり、現在各地で実施されている。和歌山市においては、平成2年秋より、パイロットスタディーにはいり、平成3年4月から本格的にこの健診に参加してきた。この健診への耳鼻咽喉科参加の目的については現在でも議論のあるところであるが、我々は以下のように考えて実施してきた。その主たる目的は、高度難聴児を発見する最後の砦として、また中等度難聴児、軽度難聴児を検出することである。そして軽度難聴をきたす疾患である滲出性中耳炎罹患児を検出することも、この健診の重要な課題としてとらえている。

今回、平成3年度の耳鼻咽喉科三歳児健診の結果について検討し、上記の目的を達成できているかどうかを考察してみたので、ここに報告する。